

日時： 2019年12月16日(月) 18:00~20:30

講師： 清原 惟氏(映画監督)

会場： 池袋キャンパス 7号館 7102教室

今年度の映画上映会では、若手監督の登竜門として知られる「ぴあフィルムフェスティバル」で2017年度のグランプリを受賞した『わたしたちの家』を上映し、監督の清原氏をお招きしてトークセッションを実施しました。

セッションでは片上平二郎所長より、例年「フェミニズム」などをテーマにしたドキュメンタリー映画を上映してきたこの会で、不思議な物語をもつフィクション映画の本作を選んだことについて口火が切られました。本作には、娘と母／記憶喪失者と彼女を助ける女性という二組の女性たちが登場するのですが、両者は同じ家のなかにもかかわらず、各々にとっての幽霊のようにお互いが会うことなく物語が進行します。そしてこの物語において、男性たちは彼女らの家に侵入する存在として現れます。とはいえ、本作は「男性＝抑圧者／女性＝被抑圧者」という典型的な二項対立を持ち込んでいるわけでもなく、かといって一見してジェンダー規範の攪乱を目論んでいる風でもありません。こうした本作に対し、清原監督作品に登場する女性たちの親密かつ微妙な関係性や、「家」「布・編み物」というモチーフ、登場人物の視線など、作品の細部に着目することを通じて、映画とジェンダーの結びつきについて議論が展開されました。セッションを通じ、映画製作には大きなテーマやストーリーだけでなく、人物の所作や衣装、小道具や建物、あるいは照明に音響など、一つ一つのディテールを詰める作業が必要であり、そうしたディテールにこそ映画からジェンダーやセクシュアリティについて、繊細に考えるためのヒントが隠されているのではないかということが示されました。

後半では、清原監督の最新作となる短編映画『網目をとる すんでいる』(2018)も上映され、更には監督に会場からのさまざまな質問にお答えいただき、貴重な機会となりました。ご参加いただいた皆様と清原氏に心より御礼申し上げます。

(立教大学ジェンダーフォーラム事務局 片岡佑介)

立教大学ジェンダーフォーラム主催
映画『わたしたちの家』上映会
& 清原惟監督講演会

2019年12月16日(月) 18:00~20:30
池袋キャンパス 7号館 7102教室



映画を通じてジェンダーを考えるということは、その作品の中に織り込まれた社会的メッセージを読み取るだけのことではない。日常の中で意識としてしまいがちな差別や偏見を問い、それを読み直し改善することもまた映画によって可能になる。本年度のジェンダーフォーラム映画上映会には、このような繊細な関係を描き出した映画作品として清原監督の『わたしたちの家』を上映したい。『わたしたちの家』の中で交錯する、記憶喪失した女性と、記憶を失った女性の二つの物語が響きあがった可能性である。しかし不確かな未来の中から、現代の「女性映画」の可能性について考えてみよう。1997年〜2017年クワンゾウ賞、第68回ベルリン国際映画祭出品、第21回上海国際映画節展映作品。第5回新人監督賞受賞作品。上映時間80分。

講師 清原 惟 監督

主催・お問い合わせ 立教大学ジェンダーフォーラム
TEL: 03-5285-3100 E-mail: gender@rcu.ac.jp
http://www.rcu.ac.jp/genderforum/



上映会の様子